

### 3. 越谷周辺の六阿弥陀めぐりと新発見のご詠歌

加藤幸一

江戸時代に江戸の町で盛んに行われていたのが「六阿弥陀めぐり」である。阿弥陀如来像を安置している六ヶ所の寺院を春と秋の彼岸に巡拝する信仰である。明六ツ（午前六時）に自宅を出て、一巡六里といわれる距離を巡拝し、暮六ツ（午後六時）に帰った。

この越谷周辺地域にも、江戸の六阿弥陀めぐりをまねて、天明八年（一七八八）に船渡村の受道によって「新六阿弥陀」めぐりが始められたのである。

次にその新六阿弥陀の六ヶ所の寺院の巡拝には欠かせないご詠歌を紹介する。

新六阿弥陀の二番である林泉寺から平成十八年五月に発見された和讃集に書かれていたものである。これまで一部不明な寺院があったが、これによって新六阿弥陀寺院がどこどこであるかが確定することができたのである。

#### 【新六阿弥陀のご詠歌】

只たのめ よろつの

つみハ 深くとも

我がほんかんの

あらんかきりは

只たのめよ 渡川の  
つみハ 深くとも  
我がほんかんは  
あらんかきりし

第一番 天岳寺

六阿弥陀

いづくと問ふて

越ヶ谷の

天岳寺へ

参る人にそ

第一番 天岳寺  
六阿弥陀  
いづくと問ふて  
越ヶ谷の  
天岳寺へ  
参る人にそ

第二番

林泉寺

増ばやし

参ることろハ

林泉寺

二世安楽ハ

弥陀の誓願

第三番

源光寺

めぐりきて

こゝに赤岩

源光寺

弥陀の手引で

渡る中川

第二番 林泉寺  
増ばやし  
参ることろハ  
林泉寺  
二世安楽ハ  
弥陀の誓願  
第三番 源光寺  
めぐりきて  
こゝに赤岩  
源光寺  
弥陀の手引で  
渡る中川

第四番 林西寺

只たのめ はやひら方の

林西寺

阿弥陀如来を

たのむ来世を

第五番 安国寺

いそげはや 弥陀の

願礼も 大どまり

安国寺

なかむ光明

第六番 清浄院

大松を 見あけて行し

清浄院

弥陀の浄土ひ (へ)

参るうれ「し」さ

けふよりハ 朝な

夕なも

南無阿弥陀仏

百万べんを

つと一心

舟田米田林西寺

只たのめはやひら方の

林西寺

阿弥陀如来を

たのむ来世を

第五番 安国寺

いそげはや 弥陀の

願礼も大どまり

安国寺

なかむ光明

第六番 清浄院

大松を 見あけて行し

清浄院

弥陀の浄土ひ

参るうれ「し」さ

けふよりハ 朝な

夕なも

南無阿弥陀仏

百万べんを

つと一心

六阿弥陀のすべての寺院の門前には、船渡村の受道が天明八年に造立した「新六阿弥陀口番」と刻まれた標識石塔がある。石標は、二番、四番、五番、六番があることがわかっていたが、平成十八年五月の調査により三番が隣の松伏町の上赤岩の源光寺にあることが判明した。このいきさつについては別紙の新聞記事を「閲覧したい」。

一番の石標は未だに所在不明ではあるが、越ヶ谷の天嶽寺にあったはずである。天嶽寺は当時この地域では最も勢力のあった浄土宗寺院であったし、林泉寺の和讃集のご詠歌にも六阿弥陀の一番の寺院としてしっかりと掲載されているので間違いはない。

石標の他に、ご詠歌の和讃を唱えて参拝するために本堂の正面に設置された扁額が、六ヶ寺すべにあつたに違いない。現在、二番の林泉寺にだけ「天明八申年六月朔日 願主 船渡村 受道」と書かれた当時のご詠歌の扁額が残っていて、本堂内に保管されている。住職の木村惠俊氏によると「旧本堂が昭和四十四年に取り壊された時に、解体保存された仏像や様々な備品が物置に保管され」「平成五年に新客殿が落慶された後、物置の中の物を整理しながら追い追いつき取り出していると、平成十五年にこの扁額が現出した」という。

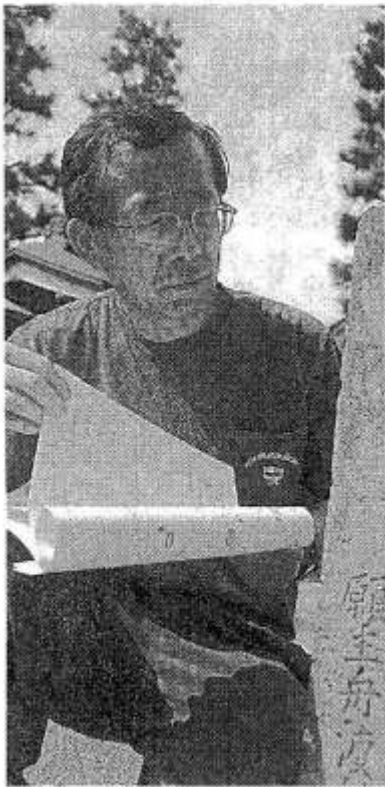
なお、登戸の報土院には「東京西ヶ原寫(うつし) 第三番 報土院 六阿弥陀如来」と書かれた扁額が本堂の正面に飾られている。西ヶ原とは、江戸の六阿弥陀の三番にあたる寺院(無量寺)がある地名である。明治以降の六阿弥陀めぐりの三番は報土院でも行われていたのであろう。その意味で「越ヶ谷の六阿弥陀めぐり」としてなら、越ヶ谷の六阿弥陀の一つに入りたい。

# 江戸期の行事 定説覆す

越谷市郷土研究会 加藤幸一さん

阿彌陀如来像を置く6カ所の寺を、観光をかねて参拝する六阿彌陀めぐり。江戸時代に越谷周辺でも盛んに行われたこの行事について、越谷市郷土研究会の加藤幸一さん(56)は、市内の寺に残さ

れた古文書を読み解き、定説を覆す研究結果を会報「古志賀谷」で発表し、市内の林泉寺(木村恵俊住職)で今年見つかった。



た古文書がきっかけだった。寺の石仏調査で住職と知遇があった加藤さんが呼ばれた。古文書を解読すると、越谷の六阿彌陀めぐりの際に道々で歌われた「御詠歌」が記されておられ、札所の六つの

寺名が歌に盛り込まれていた。従来は史料がなく、寺に「〇番目札所」と掲げられた類だけが手がかりだった。それによると、3番目の札所は越谷市にある報土院だとされていた。だが、御詠歌では松伏町の源光寺が3番目の札所とある。

加藤さんは木村住職と源光寺を調査。無縁仏の中に埋もれていた、札所であったことを示す標石の発見に成功する。そして二つの史料などから、源光寺が元々の札所で、

報土院が明治以降にとって代わったとする研究をまとめた。会の史跡めぐりに参加したのが縁で、郷土史の研究を始めて30年。「ずっとおかしい、と思っていた疑問が解きほぐれていく快感を味わった数少ない体験」と控えめに話した。

「本業」は市内に数百年あると見られる石仏の調査だ。六阿彌陀めぐりの業績を嫌みに、そちらでも後世に残る結果を出したい、と考えている。(木村尚貴)

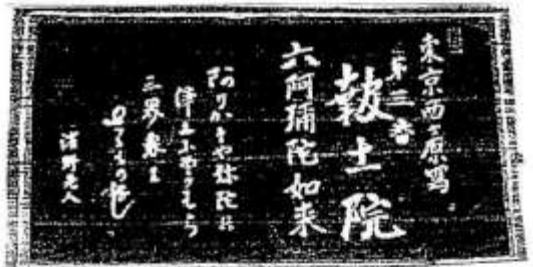
新六阿彌陀二番札所

南無阿彌陀如来  
ちかいたのもし  
二世あんらくの  
あかいの  
天明申年六月朔日  
願主 船渡村  
受道

新六阿彌陀二番札所

(唱うる)  
南無阿彌陀となふる  
(功德) (増林)  
くともくまはやし  
(安楽)  
二世あんらくの  
(誓い)  
ちかいたのもし  
天明八申年六月朔日  
願主 船渡村  
受道

※浜野老人・・・登戸村の名主を代々勤めた家柄の浜野家の先祖である。



東京西ヶ原寫

第三番

報土院

六阿彌陀如来

ありかたや 阿彌陀の  
浄土に 西かはら  
三界衆生  
のこるものなし

濱野老人

# 江戸時代のお彼岸の行事

・江戸時代の越谷地域では、春と秋のお彼岸のころに一日かけて「六阿弥陀めぐり」が盛んに行われていたと思われます。

・現代人の皆様、正月の「七福神めぐり」もよいですが、

## 「六阿弥陀めぐり」をやってみませんか。

そして、「越谷の六阿弥陀」を郷土の誇りにし、多くの人に知ってもらいましょう。

・昔ながらの徒歩では一日かかります（朝から夕方まで）。

現代人の便利な乗り物、自転車ですと、朝出て昼、

又は、昼出て夕で十分に済みます。

順路は下記の他に 4→5→6→3(上総)→2→1→3(野)、或いはその逆も可です。



# 越谷・六阿弥陀めぐり